
first kiss

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f i r s t k i s s

【Nコード】

N 1 3 8 4 P

【作者名】

潤

【あらすじ】

田中 雅紀は高校に入学した。
そこには幼馴染の平沢 奏もいた。
そして2年に進級し
部活に後輩が入ってきた。
その子の名を中野 渚といった。
基本その3人で繰り広げられる
話です。

クラブ決め

俺は田中 雅紀。

「おはよー。」

「今日も学校いくよー」

「はいはい」

とまー朝っぱらから

元気なのは俺の幼馴染の

平沢 奏である。

俺と奏は幼稚園から高校まで同じである。

なぜ平沢 奏を下の名前の

奏と俺は呼ぶのか？

それはまー小さな頃からの

習慣である。

それはさておき。

高校。

何を考えたのか

俺と奏は同じクラスだ。

ちなみに言つとまだ

1年である。

「…」

「雅紀ー」

「なんだよ？」

「クラブ何はいる？」

「あー俺はテキストに樂できそつな文化系にはいる」

しまった。

こういうと必ず俺と同じところに入ろうとするのが奏である。

「何部なんよー？」

「あーお前はどーなんよ？」

「ウチは雅紀と同じ部活ー」

「なんで俺と同じにこだわんだよ」

「だってー秘密ー」

「秘密って。」

まーそういうなら

俺も何部にはいるかは秘密だな」

「ぶーケチ」

そっつい奏は頬をふくらませた。

「ま、そういうところが

奏のかわいいとこだな」

俺は小さく呟いた。

その日の6時間目は

クラブ紹介だった。

うーん。

奏には楽できそーな文化系といったが…。
文化系すくねえ。

茶華道

邦楽

吹奏楽

軽音楽

合唱

美術

以上の6個だった。

樂できそうなの…。

とにかく俺は最大の目的はそれだ。

ということで文化系の

部活を片っ端から体験入部することにした。

まず茶華道。

樂だが…。

なんか思ってたよりも

練習（？）の量が長い。

週5日って。

月から金まで毎日嫌だな。

ということだ。

次に邦樂。

これも樂だ。

ただ正座がきつい。

その次が吹奏樂。

…。

よくよく話を聞くと

樂どころか

大忙しだ。

俺にはあわん。

しかしなんか楽器のセンスがあったらしく

吹奏樂の先輩に会ったたび

勧誘されていた。

その次は輕音樂。

輕ってついてんだから

楽だろ。

うがー。

楽じゃねえー。

ここも大忙しだ。

そして合唱。

俺の声ではバスらしい。

で、しかもそのバスには

人員不足で困ってるらしい。

しかし、話を聞けば

月から日まで練習が毎日あるらしい。

そりゃバスだな。

しかし、

バスで人員不足のため俺は

合唱部の先輩に会ったび

勧誘されていた。

最後に美術。

…。

こりゃ楽だ。

マジで天国。

可愛い先輩いっぱいだし。

で、入りますといおうと

思ったときにづいたが…。

俺絵のセンスゼロだー！。

そりゃ無理だな。

ということだ、

俺は邦楽部にはいった。

一言でいえば

琴や三味線を弾くクラブだ。
別段大会があるわけでもなく
発表会があるわけでもなく
ただ文化祭のときの発表だけらしいしな。

新入部員

俺は元々この高校には
滑り止めで来たから

勉強面で苦勞することはなかった。

部活面では…。

2学期に入つてのことだ。

いつも通り先輩と

話しつつだらりと練習していたら。
ガララ。

誰か来客が来た。

唯一の1年の俺が誰か確認にでた。

「…」

「田中くん！。」

「誰だったの？」

「か…奏？」

「何してんだ？」

「ぼーっとしてる奏がそこにいた。」

「田中くん」

「あ、はい。」

「俺の友達でした」

「雅紀…」

「邦楽部だったんだ」

「あ、おう。」

「俺に用か？」

「ううん。」

「雅紀にじゃない。」

「邦楽部に体験入部に来たの」

「ぶちよー。」

俺の友達が体験入部にきましたー」

「じゃ、あげてあげて」
ガララ。

部室の教室が閉まった。

そして練習場へ行くための
扉を開けて奏は邦楽部へきた。

「あ…」

そうぶちよーは声を漏らした。

きつと俺の友達と言うから

男が来たと思ったのだろう。

来たのが奏で女子であることに
ビックリしたのだろう。

「田中くんの友達って

女の子だったんだ…」

ちなみにいうとぶちよーは
女性である。

「はい。」

平沢 奏と申します」

奏の丁寧な口調を聞くのは
初めてだった。

「ぶちよー。」

調弦どうします？」

「あー平沢さんは

琴ははじめて？」

「はい」

「じゃ、田中くん。

さくらさくらでよろしくー。

田中くんもたまにはさくらさくらやりなさいよー。
文化祭で発表するんだから」

「了解ですー。

でも今の雪はな難しいんで
もうちょいしたら

またしますー」

俺がさくらさくらの調弦している間
奏とぶちよーは何か話している様子だった。
まーガールズトークって奴だろ。

そして奏は邦楽部に本格的に入部した。

そこまでは別によかったんだが…。

噂

奏が邦楽部に入部してから。

俺と奏が一緒に

毎朝登校してるのが

クラスの連中にばれた。

今思えば2学期の中ごろの

ちよいと前までバレなかったのが不思議だぜ。

いや、ただの幼馴染で近所で

ただそれだけだからやましいこともないし、

隠す必要もないが…。

そしてクラスで俺と奏が

付き合ってるとかいう噂がたった。

「なー田中。

平沢と付き合ってたって?」

「別に付き合ってたねえよ」

「毎朝登校してるのに、

付き合ってたいの?」

「ああ、そうだ

ただの幼馴染で近所だからだ」

「好きでもないの?」

「つたりめえだ」

「ふーん」

などという的な会話が

ほぼ毎日誰か違う人物としている状態が続いた。

その噂は学年の違うぶちよーの

耳にまでまわった。

「田中くん。

平沢さんと付き合ってるってホント?」

「嘘ですよ。」

ただの幼馴染で近所だから
毎朝登校してるんですよ」

そんな噂が流れようと

奏は必ず俺の家まで来て

「おはよー。」

今日も学校行こう」

というのだった。

たまたま奏が風邪で休みの日。

俺はいつもの時間になっても

奏が来ないことに違和感を感じ

近所だただの幼馴染だし。

ということとで奏の家まで行ってみた。

ピンポン。

「はいー」

でできたのは奏の母だった。

「あの奏さんは？」

「あー奏なら今日は風邪で

学校休むのよ」

「わかりました。」

お大事にとお伝え願えますか？」

「わかりました」

その日。

俺は一人で登校した。

その途中クラスメートの女子が前のほうにいた。

別に話しかける気もなかったが。

その2人の話し声が聞えた。

「ねえねえ。

知ってる？」

「何がー？」

「平沢さんと田中くん付き合ってるらしいじゃん」

「うん。それよく聞くよね。」

男子の方がよく言ってるね」

（またその噂か…）

その女子の会話に俺は口をはさんだ。

「おはよ」

「あ、おはよう…。」

田中くん」

「おはよー。」

今日は平沢さん一緒じゃないの？」

「ああ。まあな。」

さっき俺とか…平沢の噂してたよな？」

突発的に奏といいそうになったが

奏だって女子だ。

女子のこと下の名前で呼んでるのがバレたら

余計な誤解が広まりかねん。

「うん、まあ…」

「俺は誰とも付き合ってねえからな」

といって俺は話に首を突っ込むのをやめた。

しかしまーその後も聞えた。

「それね、平沢さんの片想いらしいの」
「マジでー。」

なんか平沢さんかわいそう…」

（奏が俺のこと好きだあ？
そりゃねえだろ）

まーいつか。
そう思い登校した。

文化祭

そして時は経ち

文化祭当日。

俺の所属する邦楽部は

さくらさくらと雪はなを演奏することになった。
しかも2回も。

演奏中。

誰かの視線がずっと俺にあったような気がした。
まさかな。

聞いてたのは近所の人と生徒とその友達くらいだな。

2回の演奏終了して

しばらくして。

「ぶちよー」

これで引退っすか？」

「そうね」

「…さびしくなりますね」

「田中くんと平沢さん2人でがんばってね」

「はい。」

すいません、

なんかプレゼントとか…」

「ぶちよー」

奏が元気よく声をだした。

というかこいつ演奏終わってから
今までどこ行ってたんだ？

「引退ですよね…」

「そうね」

「花束買ってきました」

「あ、ありがとう」

「すいません、俺そこまで気が回らなくて…」

「いいのよ、田中くん。」

引退を思ってくれる気持ちがあるだけで…。

まだ学校にはいるから会ったときはよろしくね」

「はい」

そして学校内でぶちょーと会うことはなく
卒業式を迎えた。

まー卒業式に部室で、俺と奏は

2人で花束をぶちょーにプレゼントした。

2年

そして俺は2年に進級した。
もちろん奏もだが。

まー俺の所属してる高校は
2年から文系理系にわかれるが、
俺も奏も文系であつた。
それゆえに同じクラスだつた。

部活のほうはというと。
1年の勧誘に行つたが。
誰も入りたいや、
体験に来たいというやつはいなかつた。

そんなある日。
邦楽部の部室に来客が…。

「あのーすいません。
邦楽部つてここですよね？」
一応部長になつてた俺が応対した。
「そうですけど…」

そして俺は来客の靴の色を見た。
緑色つまり1年だ。

「どうしました？」

「私、体験入部に来ました」
「マジで!？」

「はい…」
ガララー。
「奏ー。」

「体験入部の子来たぞー」

「ホンマに」

「調弦さくらさくらよろしく」

奏が調弦してる間。

「キミ、名前は？」

「中野 渚です」

「中野さんね」

とまー色々と聞いていた。

もちろんこつちも

どんなクラブかは話しておいた。

どうやら音楽系のクラブに入りたかったらしい。

「それじゃなんで邦楽部に入ろうと

思ったの？」

「…」

そこだけは絶対に答えてくれない

中野さんだった。

うざい

2年になったが

奏の朝の

「おはよー。」

「今日も学校いくよー」

は止まらなかった。

正直もう俺はこれにはうんざりしていた。

なぜなら俺はその頃から

恋をしだしていたからだ。

誰にかって？

そりゃ部活の唯一の後輩の

中野さんだ。

ある朝。

「おはよー。」

「今日も学校いくよー」

奏のいつも通りの声に俺は言ってしまった。

「もーお前うぜえんだよ」

「うざいってヒドイ。」

「もう雅紀なんて知らない」

と頬をふくらました。

昔の俺なら

この仕草を見て可愛いと思っていた気がするが
今はそんなことを思わなかった。

そしてプイツと奏は一人で登校した。

奏が登校して

その後に俺が登校。

そんな感じが数日続いたので
1年からクラス一緒だった奴にいわれた。
まー名前は…安倍 孝弘といったな。
そーいえば奏以外の奴と話した記憶が
あんましないなあ。

「お前、平沢さんと別れたん？」

「別れたもくそも

元から付き合ってたねえよ」

「ふーん。

じゃ、俺平沢さんとりつかない？」

「どーぞ。

ご自由に」

そして…。

安倍が奏に近づき

楽しげに会話してた。

その数日後。

安倍の口から衝撃的な事実が
俺にいわれた。

「田中！。

ホントに平沢さんもらちゃったよー」

「ハ？」

「だーからー」。

平沢さんと付き合ってたんだよ」

「そーか。

よかつたな。安倍」

「おうよ。

正直1年のときから

平沢さんを狙ってたんだが
お前と付き合ってるらしいから
諦めてたんだがなあ」

「田中、お前はいいのか？
今までの朝の登校とか

その他諸々の平沢さんの愛を
俺に奪われんだぞ」

「あー別にいいさ。

俺別に好きな人がいるし」
「そーかい」

うざい（後書き）

すいません。

しばらく更新できません。

中野さん中心

奏と安陪が付き合ったという事実を知ってからの初の部活。

ガララー。

「おう。」

奏。

よかつたな。

安陪と付き合ったんだってな」

彼氏もちの女子を下の名前で呼んでいいか少し悩んだが俺はいままで通り「奏」と呼んでいた。

「そうよ、

安陪くんは雅紀みたいに

ウザイとかいわないいい人だもん」

ガララ。

「こんにちわー。

すいません。

今の話聞いちゃいました」

俺の心の癒しの人物、

中野さんがやってきた。

「田中先輩と平沢先輩は付き合ってたんですね」

「おう」

「そうよ」

「私は2人が

ラブラブで登校してる姿

何度か見てたんで

てつきり付き合ってるものかと思ってました」

「俺と奏はただの幼馴染で近所さんだ」

「そーなんですか」
なぜか少し嬉しそうな表情をしていた
中野さんだった。

その日はその後普通に
だらりと話しながらといつても
あの俺の「うぜえ」の発言以来
奏はなぜか俺に対しては
冷たい態度だったので
俺はたいてい中野さんと話していた。
もちろん、
奏も話すときは俺ではなく
中野さんだった。

また文化祭

今年も文化祭がやってきた。
演奏曲目はさくらさくらと
六段の調べという曲をやった。
そして文化祭終了後。

なぜか俺は中野さんに
部室に呼び出されていた。

「やほー。」

どしたの？

部室に呼び出して」

「あの田中先輩」

「はい」

「す、す、す、す…」

「す？」

まったくその後の発言が想像つかなかった。

「あの少し長くなるかもしれませんが」

話を聞いてもらえませんか？」

さつきまでの「す」の連呼はどこにいったのだろうか？

「いいよ。」

とりあえず部室に

入ろうよ」

「はい」

ガララ。

「あの、先輩と私の初めての出会いって
いつだと思えますか？」

「そりゃー中野さんが

体験入部したいっていったあの日じゃないの？」

「それが違うんです」

「え…？」

俺は首をかしげた。

まさか勧誘のときにとかいうのだろうか？

「じゃ、いつなの？」

「それはあの…」

去年のこの

文化祭の邦楽部発表なんです」

「え…？」

でも中野さん去年はまだ中3じゃないの？」

「はい。」

ここが志望校だったんです。

で、文化祭を見に来たんです。

それで邦楽部って珍しいなあって思っ

てなんとなく聞いてみようと思って

それで初めて先輩とであっただんです」

「え…？」

まさかとは思うが去年の文化祭のときに

感じた俺への視線は中3のときの

中野さんだったのだろうか？

「それでこの邦楽部に入ろうって思っただんです」

「そーだったんだ」

「それで入ったはよかったんですけど。」

そこで私は田中先輩が平沢先輩といつも

ラブラブしてる姿みて

諦めようと思ってたんですけど…。

なんか同じ部室にいて

同じ空気吸えてるだけで幸せに感じてしまって

やっぱ諦められなかったんです」

諦めよう？

何の話をしたいんだ？

中野さんは。

「でも、先輩が

平沢先輩と付き合っただけを知って。

私はものすごくほっとしたんです」

む？

まさかな。

「私、田中先輩が好きです…。

付き合ってもらえないでしょうか？」

まさかが来た。

正直いつか俺から告白しようと考えていたのに

まさか中野さんから告白されるとは思わなかった。

「うん。いいよ。

全然いいよ。

というか正直言つと

中野さんが好きだったんだ」

「あ、ありがとうございます」

初デート

よくよく考えてみれば

俺も無神経なことをしたものだ。

確かに俺は中野さんが好きだった。

告白されOKして。

基本会うのは部活のある月・金曜日だけだ。

そこには奏もいる。

俺と中野さんだけがいる

ラブラブできる場所ではない。

よく考えたら奏に悪いことしたなあ。

でも奏もクラスで安陪と

ラブラブしてるからいつか。

そして中野さんと初デートの日。

電車で揺られて

遊園地に着いた。

まー俺らは普通にカップルがするような

メリーゴーランドにのったり

コーヒーカップにのったり

いろんなアトラクションにのった。

そして遊園地定番

ジェットコースターに並んでたときだった。

「」

「どしたの？」

中野さん？」

「いえ、あの前に並んでる人

平沢先輩じゃないですか？」

「おーホントだ。
奏っぱいなあ」

「むう」

中野さんが頬をふくらました。
これまた可愛いもんだ。

「どしたの？」

中野さん？」

「私も先輩にく中野さん>じゃなくて
平沢先輩みたいに下の名前で呼んで欲しいです」
「そっかー。」

な、な、…」

どうしてだろう？

奏のときはすんなりいえるのに

中野さんのときはなんか

ためらう…。

「な？」

「渚…」

「ありがとうございます。」

これからも渚でよろしくお願いします」

「うん」

そんな会話に気付いたのか
奏がこっちに振り向いた。

「あー中野さんに田中くん」

「おいおい、奏ー。」

田中くんって」

「ウチは今安陪くんの彼女なの。
好きでもないアンタの下の名前を呼ぶのは
変だと思ったから

田中くんって言ったの。

アンタもこれからウチ呼ぶときは

平沢さんって呼びなさい」

「別に彼氏ができたからってそこまで変えんでも…」

「いいじゃないですか、

雅紀先輩。

平沢先輩のことは

これから平沢さんって呼べば」

渚がいった。

「雅紀先輩って」

と俺が照れていると。

「へえー。」

田中くん。

中野さんと付き合ってたんだ。

まー末永くお幸せにー」

そしてジェットコースター並んでるときは
いつも楽しくなかった。

そしてジェットコースター終わってから

渚の門限が近いということだ

帰路につくことにした。

手作り弁当

平沢さんが俺と渚が付き合ってることを知ってから
渚はよく俺のクラスに昼休み顔出すようになった。
なぜか？

ふふふ、聞いて驚け。

渚手作りの弁当を
俺に届けにだ。

それを見ていた男子は
というか安陪だが…。

「田中！」

平沢さんの次は後輩を彼女にしたんか」

「平沢さんとは付き合ってたねえよ。」

まー渚とは付きあってるけどな」

「…そーかい」

それが何日も続いた。

「なんか毎日悪いねえ」

俺が渚にかけた言葉だ。

「いえいえ。」

大好きな雅紀先輩のためです。

これくらい頑張れます」

「いや、頑張らなくていいよ」

「え…」

「まさか私のこと嫌いになっただんですか？」

「いや、そーいう訳ではないけど…。」

でも毎日悪いからいいよ」

「そうですね、わかりました」

正直言おう。

俺は弁当2個も食ってるおかげで
体重が激増中だ。

あ、2個ってのは母が作ってるのと
渚が作ってきてくれるやつな。

ということで、

会うときは

部活のときだけになった。

まーたまにデートもするが…。

クリスマスイブ

そして時は経ち。

クリスマスイブ。

そんな日も学校だった。

「あーくそ」

…。

俺の目の前でラブラブしてる

平沢さんと安陪に俺はイラついていた。

いや、別に平沢さんとられたから

イラついてるわけじゃねえし。

（俺も渚と同じクラスだったらなあ…。

こんなときでもラブラブできるのに…）

そーいえば毎年クリスマスって

平沢さんが俺ん家きて

パーティーしてたよな。

とか考えていると

俺の視線に気付いたのか。

平沢さんが話しかけてきた。

「何？」

田中くん？

さつきからウチと安陪くんのほう

ばっかみてー」

「別に見てねえし」

「まさかアンタ今年も

ウチ誘ってクリパ、アンタの家でやる予定だから

来いとか言うんじゃないでしょうね？」

「いわねえよ。

か…平沢さんには安陪がいるじゃねえか」

「そう。」

「今年は可愛い後輩とでも過ごせば？」

「そーしたいとこだよ」

そしてその日の帰路。

渚と帰っていた。

渚は高校まで電車登校だ。

学校最寄の駅にて。

「では、雅紀先輩。」

私はここで…」

「なあ…渚。」

「俺ん家明日こねえか？」

「はい？」

「いやーなんというかな。」

「俺の家族そういうイベント好きでな。」

「去年までは平沢さんが俺の家に来てたんだが…。」

「今年は渚とクリスマス一緒に過ごしたいんだ。」

「別にやましい考えとかないから」

「あ、じゃあ行かせてもらいます」

「じゃ、明日夕方6時にここでOK？」

「あ、はい」

クリスマス1

クリスマス。

5時50分に待ち合わせ場所に俺は行った。

そこにはまーなんというか

渚と平沢さんがいた。

「…」

（なんで、

か…平沢さんがいるんだ…？）

少し遠くから見ておこう。

そう俺は思った。

渚と平沢さんの声が聞こえた。

「どーしたんですか？

平沢先輩。

目真っ赤ですよ」

「なんでもないよ」

「そうは見えませんよ。

なんか泣いた後もあるっぽいですし」

「そう…」

「あ、言いにくいことでしたらいいです」

「ウチね。」

さっき安陪くんをふつてきたの」

「そーなんですか…。」

でもそれでなんで泣いてるんですか？」

「ウチだってまだ好きだよ？

安陪くんが…」

「それだったら余計なんですか？」

「だって中野さん聞いてよ。

いきなりウチを襲おうとしてきたんだよ。

そりゃ好きだけどまだ
ウチらは高校生だし…。

嫌がってもまだ襲ってくるから。

じゃあ、もう恋人はやめようって言うてきたの…」

俺はその一部始終聞いてしまった。

時計を見た。

6時10分。

渚を待たせちゃいけないというよりも

か…平沢さんがすごく心配だった。

「好きなのにふるか…。

まー

か…平沢さんらしいといえばそうだが…」

そう俺は呟いた。

でもどーしよう？

今の話聞いてなんもなしで

渚に「待ったよね？ゴメン」なんて言えないし…。

かといっけていきなり出ていって

か…平沢さんに「大丈夫か？」とはいえんしな。

ん？待てよ。

目が赤い。

そこに着目して話しかけたらいいじゃないか。

いや待て。

渚もそこにいるんだ。

渚よりも平沢さんに話し掛けるのもなあ…。

ん？

そうか。

そうすりゃいいんだ。

クリスマス2

「すまん、渚。

待たせた」

「別にいいですよー」

「あ、平沢さんいたんだ…。

目真っ赤だぞ？

大丈夫か？」

とまー俺は渚の次に

か…平沢さんに声をかけることにした。

「雅紀…。

ウチ…。

安陪くんふつてきたの…。」

「そうか…奏も辛かったろう」

渚が機嫌悪そうにした。

そりゃそうだろう。

目の前で彼氏に

他の女に優しくされたらねえ…。

「雅紀先輩…。

平沢先輩の家とご近所なんですよ？」

「うん…。

まあな」

「じゃ、私はもう少し待つんで。

平沢先輩を送ってやってください。

私から見ても先輩が心配です」

「すまん、渚…。

そうさしてもらっわ」

そついい俺は奏を家まで送ることにした。

まーチャリで2人乗りして
数分だしな。

そして奏を家におくってる最中に
どついう経緯で奏が

安陪をふったのか聞いた。

聞いたというよりも奏が一方的に話していた。
まーそりゃ安陪が悪いな。

奏の家に着いた。

そして俺は再び駅へ向かった。

クリスマス3

駅到着。

そこには渚がいたが、
見知らぬ男に囲まれていた。

「よーねえちゃん。

俺らとあそばへん？」

「嫌です」

そう渚が言ったが

一人が渚の腕をつかみ
連れ去ろうとした。

そこに俺が…。

「やい、その子嫌がつてるだろ？
やめてやれよ」

「ああ？」

「殺されてえのか、テメエは」
「ハ」

そう溜め息をつき俺は続けた。

「言い方変えるわ。」

俺の女に手えだすな。ボケ」
「つけ。」

彼氏かよ。

おもんねえ」

「かえろーぜ」

そっぴい渚の周りにいた男たちは去っていた。

正直言つて

もしケンカになっていたら

俺に勝ち目なかっただろう。

「雅紀先輩！。

怖かったですー」

「ゴメンな、俺が奏を送りに行ってる間に
怖い目あわせて…」

「それじゃとりあえず先輩の家に行きましょう。
ずっと待ってたんで寒いんですー」

クリスマス4

クリスマス。

俺ん家にて。

「わぁ。

これが雅紀先輩の家ですかー」

なんというか玄関に

merry christmasとかかれた

モールが飾られてた。

さっきまでなかったんだがなぁ…。

母の仕業だろう。

「おう。

まー中はいりー」

ガチャ。

「おじゃまします」

渚がいった。

「あら。

今年は奏ちゃんじゃないのね。

誰かしら？」

出迎えた母がいった。

「あ、俺の…」

「雅紀先輩とお付き合いさせてもらってる

中野 渚と申します」

「あらー」。

お父さんー。

雅紀に彼女できたー」

そう言っってリビングへいった母である。

まーその後はごく普通の
クリスマスパーティーだった。

その帰り道。

駅へむかう途中。

「あ、雪だ…」

「そうですねー。」

今年はホワイトクリスマスになりましたねー」

そして駅到着。

「今日は楽しかったです。

ありがとうございました」

「おう。なあ渚…」

「なんででしょう？」

「俺やっぱ渚が好きだ」

と言おうとした瞬間。

俺の視界に渚が入り

キスされた。

顔を赤らめて渚が言葉を続けた。

「ファーストキスです」

「そっか。」

俺もだよ」

俺もきつと顔を赤らめていただろう。

そして渚を見送って

俺は家へと帰路についた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1384p/>

first kiss

2011年1月5日16時47分発行